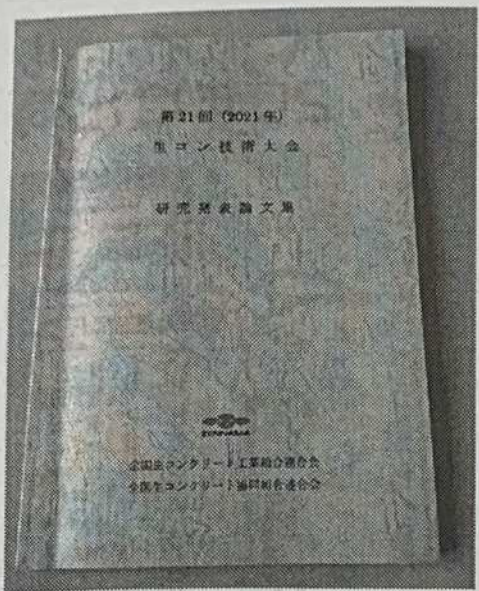


生大会 論文集 フローコンへ対応着々 特定課題で8論文収録

4月14～15日に開催予定だった第21回生コン技術大会は中止となったが、中止の決定以前に論本が投稿されていたことから、全生連は例年通り『第21回(2020年)生コン技術大会研究発表論文集』を発売した。現在、全生連ホームページ

等で購入している(1冊4000円)。

今回の特定課題は「スランプロフローで管理する普通コンクリートの製造・品質管理」JIS A 5308の19年度改正で普通コンクリート区分にスランプロフローが追加されたことを受け、設定さ



られた。次の8件の投稿があった。ほとんどが、今後の本格的な製造・出荷に向けた基礎データの収集や試験方法の検討等が目的だった。

たとえば、さくら生コンの西晶弘氏ら大阪兵庫生コンクリート工業組合の組合員による「スランプロフロー管理する普通コンクリートのフレッシュ性」と硬化物性に関する報告(特一)では、3トンにわたる実機実験の結果を報告し、まとめでは「本報告で得られた知見を活用しMFC(高流動性コンクリート)の標準化を促進し、コンクリート構造物の品質向上

および生産性向上に貢献したい」としている。

生コン業界ではプロ管理の普通コンクリート

を新たに標準化する動きが活発でないともいわれたが、実際には少ない工組や協組、工場

などが将来の標準化を視野に入れて、基礎研究を進めていることがうかがえる。

暑い日は供試体持ち帰り? 「運搬装置」も考案

ユニークな研究として「戻りコンクリートから製造した乾燥スラッジ微粉末を用いたプレキャストコンクリートの構造体強度補正値の検討」(研2、三和石産の大川憲氏ら)、「共同納入のための混用生コンに関する基礎研究」(研3、広島県東部生コンクリート協同組合技術委員会の河野秀和氏ら)、「猛暑日に現場採取した供試体の即時持ち帰りに関する研究」(研究14、愛媛県生コンクリート工業組合南予技術セン

ターの森田剛介氏ら)、「当試験場における内部精度管理の取り組み」(研17、山梨県コンクリート技術センター共同試験場の関野一男氏ら)などがあった。

共同納入に関する研究では、複数の生コン工場から同一工区に生コンを出荷する状況を想定し、強度が異なるコンクリートを納入した場合や、色の違いが発生した場合の影響などについて検討している。

猛暑日の供試体持ち帰りに関する研究では、現場で製造した供試体を常温が確保できない場所へ運搬することは合理的といえる。

さらに同研究では、運搬による強度低下などの影響を低減するため、「振動低減装置」を試作している。ジェル素材の振動低減パッドを利用した運搬用の装置で、複数の供試体を収納できるとで、運搬による強度低下を低減することも確認した。まとめでは、さらに改良した低減装置を使用することで、「運搬による供試体強度への影響を最小限に抑えること」で、猛暑日だけでなく夏期、標準機においても、供試体の即時持ち帰りをJIS規格改正に向けて提案できる」という。

試験場の内部精度管理では、各種試験の結果など内部のデータを活用して試験精度を維持する手法やフローを検討した。

り組むべき事項について
連業界と連携を取らない
準の緩和)で、生コン
の生コン、生コン